

詠

毎日歌壇

水原 紫苑 選

転がせと楳田を描き戻り来るレモンは楳田を  
逃れられない 甲府市 村田 一広  
△評▽レモンの好きな人間たちも、あるいは  
は田ではなくて楳田の運命のままに生きて  
いるのかも知れない。

ぼくたちはなにも知らないほんとうの母のう  
つろしさのことなんて 横浜市 安西 大樹  
△評▽「ほんとうの母」がいるなら私たちは  
すべて生きていくことを許されるはずだ。

ひかりのみ置いて去るにはしのびなく遺言と  
して極楽のひとつ 東京 境 千尋  
剥製の猛禽たちの内側にたしかな雪の錯乱が  
ある 加古川市 石村 まい

冬晴れのパドックにひとり眠伏せ長き睫毛  
の牝馬は静か 所沢市 里見 脩一  
白波の寄する伊良湖松の枝に老鷹来たり沖見  
て一日 尾張旭市 小野 薫

冬それは可視化の季節くやしさを吐く唇に気  
霜は溢れて 大阪 中村 杏  
絶叫のように光ってすぐ消えた真冬の海の揺  
れる水面の 宮古島市 塩見 侘

背を裂いてひろげる翅の透明な痛みは春の虚  
ろな支配 岡崎市 よしなに  
戦争に倦みたる人の銃口に花の枝さす神はお  
らぬか 神戸市 中村 照明

伊藤 一彦 選

だんだんと恥ずかしいを忘れていくパッチワ  
ークを続けるうちに 山形市 新道百合子  
△評▽このパッチワークは他人の手になる  
ものをつぎはぎして文章を書くことだろ  
う。恥ずかしさを忘れぬ良心のうすまの歌だ。

属性と会話をしている部下・上司・取引相手・  
友人・家族 東京 藤沢 静二  
△評▽現代の人間関係を鋭く詠む。生身の  
人間としてなく「属性」と会話してると。

大方は高度成長担い来し者ら座り病院廊下  
吉野川市 喜島 成幸  
長靴に雪を入れつつ訪ねたる丘の上なる多喜  
二の石碑 延岡市 九鬼 勉

生きていることしかできない時もあることを  
知ってる我も娘も 奈良市 久保 祐子  
会うたびに笑顔に向けてくれるひと笑んでは  
かりもいらぬ日々 堺市 一條 智美

「生い立ち影響せず」の一面が目につれぬ  
よう内側に折る 川崎市 桐田 宏明  
黙々と夫が法衣を縫って先代からのパトンを  
受ける 兵庫 廣澤 真希

車窓には闇の雪野よ病室の母を見舞ひて重ね  
たる嘘 仙台市 三本松 拓  
天空のまろろど六花結晶が緑に座して憩いの  
ひととき 八幡市 田中 まこ

米川千嘉子 選

母九十二何にでも付ける「なんとか」を歩ける、  
行けるで来る生きてる村上市 杉江 正子  
△評▽「なんとか歩ける」「なんとか生き  
てる」。母がリュックを背に雪道を歩く歌  
も。「なんとか」の思いは一層だろ。

ゆっくりと発酵してゆくパン生地にささいな  
怒りを託す年始め 東京 岡田さやか  
△評▽あまりうれしくない年始めのよ  
う。怒りは膨らんでおいしさに変わるか。

起き抜けのコーヒーそして新聞がSNSを解  
毒してゆく 福岡市 西田 浩之  
ソフラーのソロを初めて執るひとの桃のごと  
くにみりゆく頬 京都市 袴田 朱夏

信濃路の春近づけばいたたきし赤彦夫人の  
胡桃思ほゆ 鹿嶋市 加津幸根夫  
世界から運れていても構わないロード・モ  
ネの絵に差すひかり 町田市 郁羽 凪

ペトナムから疾風のように現れて去った息子  
の机に光が 大阪市 小熊 光子  
認知症の義母と我とは瓜二つ「言った」「言  
わない」共に譲らず 和歌山 中西 幸代

二本から始まり三本四本にそして今一本にな  
りし歯ブラシ 米子市 永田富基子  
断捨離にまだねちねちと出し難し作歌のノ  
ト百十五冊 吹田市 鈴木 基亮

加藤 治郎 選

先生は試験開始を告げた後いつもの窓辺で空  
を見て 川崎市 新井 将  
△評▽大らかな先生である。生徒を信頼し  
ているといふこともあろう。自由な人間性  
が現れている。印象的なスケッチだ。

ラッオからかなしい、という音が聞こえて聞  
きたかった言葉だった 横浜市 あ や  
△評▽音として捉え言葉として受け止めた  
のである。自分のかなしいことじんわりと私のす  
子と話すこともいいことじんわりと私のす  
べてを回復させる 福岡市 藤田 美香

濡れた服からさぼりとしたシャツに着替えて  
部屋はまだ雨の匂い 名古屋 森本 有  
朝焼けに驚いた蛇が逃げ込んだフランス・カ  
フカの革の手袋 名古屋 朝田おさる

たよりない音ばかりなんて言わないで底いた  
くなる小さなピアノ 広島市 白岩 青依  
目をあける時間の長い一日は深い呼吸をわす  
れていきます 津市 川原田明子

煙草さえ電子になってほくたちはプラスチック  
クなくちつは交わす 春日井市 月夜の雨  
世界。かも知れずこわばるおやゆびで一枚一  
枚剥がされゆく 京都市 土 玉

眠るたひ宇宙を旅し還るから朝は生まれたば  
かりの私 福岡市 山下 朝音

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の  
自作を2首・2句まで。住所、氏名、年  
齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住  
所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句  
は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。毎日新  
聞デジタルの投稿フォーム(https://mainichi.jp/k  
adan-haidan/)でも受け付けています。

詩歌便り

◇第65回俳人協会賞—蘭草慶子「雪日」▽第49回  
俳人協会新人賞—遠藤容代「明日の靴」、庄田ひ  
ろふみ「聖河」▽第40回俳人協会評論賞—福井拓也  
「久保田万太郎とジャンルの諸相」▽第40回俳人協  
会評論新人賞—池田瑠那「境目に立つ、異界に坐す」  
◇第26回現代俳句大賞—坪内稔典(創作と研究  
で俳句文化を長年支えたことなどが評価された)